
学園革命

夜神涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園革命

【Zコード】

Z9647C

【作者名】

夜神涼

【あらすじ】

世の中に不満を持つ三人が自分達が住みやすい世界を作るため学園を変えていく・・・

序章 はじまり

「やつてられねー」

そう叫んだのはいつも学校の帰り道。今日中学を卒業した八神涼介、城嶋恭介、斎藤隼人の三人はふらふらと帰路を歩いていた。

「何がやつてられないんだよ涼介？」

恭介が呟いた。

「ははは・・・確かにこの三年間本当に何の問題も起じらず平和だつたからなあ、物足りないと言えば物足りないな」

隼人が乗ってきた。

「・・・まったく俺はこんなつまらん日常を望んだわけじゃないってのに」

はあ・・・とため息をつく。

「ため息なんかついてると老化が進むぜ?」

笑いながら恭介は言った。

「ムツほつとけ」

そうやつていつもの感じで会話を続けると

「なあ、高校行つたら何する?」

いきなり隼人が切り出した。

「んあ? やっぱあれだろ? いつもみたいに三人でバカやって・・・」

涼介は言いかけてやめた。

それじゃ変わらないじゃねえか。俺の望みはこの平凡な日常をぶつ壊して、最高にスリリングでエキサイティングな日々を満喫することだ。それには何か行動を・・・

「どうかしたか? 涼介?」

隼人が顔を覗き込む

「また馬鹿なこと考えてるんじゃねえの?」

恭介が茶化す。

そうだ。涼介は閃いた。

「生徒会にでも入るか?」

「はあ!?」

一人は顔を見合させたあと涼介のほうに振り向く

「これから始まろうとする平凡な学園生活をぶつ壊す、そのためにまずは生徒の代表になつて同じ不満を持つ人間を仲間にし、マニユ

アルドおりに仕事をして責任から逃げることだけに必死になつていて俺達のことを形だけ考えるふりをして結局自分のことしか考えていないクソ教師共をブツ潰して俺らが住みやすい世界を築き上げようぜ」「

熱く語る涼介を見て

「・・・まあしあうがない。言いだすと止まらないからな涼介は・・・よし昔からのよしみだ、付き合つてやるよ」

といつて恭介は隼人をチラリと見る

隼人は無言で頷いた

「そう！俺たちは学園の革命者だあ

そう叫んで涼介は歩き始めた

二人も後に続く

これから始まる学園生活に胸を膨らまして・・・

続く

第一章 高校生活の幕開け（前書き）

とりあえず目標も決まった三人は私立城北高校に入学していく・・・

第一章 高校生活の幕開け

4月9日

三人は私立城北学園に入学した

「・・・まあ生徒会なんて入学当日に入れるもんじゃないし、立候補しても確実に入れるものじゃないしな」

ため息をつきながら涼介は呟いた

「まあ俺達中学の時生活態度最悪だったし、喧嘩もいっぱいしてた
しな」

恭介が言った

「立候補しても当選する確実はゼロに近いぜ？」

隼人が続く

「う~む」

・・・ 考えても何も考えが浮かばない

「取り合えずそのことは置いといて、運良く同じクラスになれたし
教室行こうぜ」

「・・・そうだな。まあ後々いい考えが浮かぶぞ」

三人はふらふらと一・C の教室へ歩いて行った

「え、今日からこのクラスを受け持つことになった担任の宮下直人だこれからよろしくな」

「副担任の水島玲子です。これからよろしくね新入生さん？」

思っていた以上に若くて美人な先生だったためか、男子グループの歓喜の声が聞こえる

「はいはい、うるさいぞお前ら。え、それでは手始めに一人ずつ自己紹介をしてもらお。まずは、出席番号1番赤川大介！」

「はい、え、と出身中学は……」

お約束な自己紹介が終わり、簡単な学園の説明などがあつたあと今日の学業は終わった

「……平凡だな」涼介が呟いた

「まったくだな。せめてこうもつといかにも不良です。とかぐるぐるメガネかけて語尾に「でヤンスつて言つがり勉野郎がいればなあ」

恭介もつまらなそうに言った

「まあ女の子のレベルが全体的に高いからいいじゃん

笑いながら隼人が言う

「右に同じ」

二人がハモつた

「何を男三人でむさ苦しい会話してるんだ？」

突然誰かが会話に突つ込んできた

「なんだよ美奈。暴力女は消えろ」

そこに立っていたのはポニー テールでいつも冷静で口が悪いがなぜか男子から人気のある三人の幼馴染、桐島美奈きりしまみなだつた

「・・・殴る」

涼介は吹っ飛んだ。

「痛つてえ！」

「まったく毎度毎度人のことを暴力女や殺戮マシーンとか呼んで・・・」

「事実だらうが！」

頬を抑えながら涼介は反論する

「で、何話してたんだ？」

涼介をスルーして言った

「ああ。三人で相対性理論について語り合つてた」

笑いながら隼人は言った

キツと隼人を睨みつける

「冗談だよ。・・・ああ そうだ美奈、俺達どうやつたら生徒会に入れると思う？別に入れなくともいいから取り合えずこの学校を俺達の手で変える方法を教えてくれ」

恭介は言った

「お前らが生徒会に入る？学校を変える？・・・あんた達この学校を廃校に追いやる気？」

「そこまで言つか！」

すかさず涼介が突つ込みを入れる

「まあ生徒会なんて簡単には入れるでしょ？普通の人はやりたがらないわ。あと問題なのは演説ね。みんなを納得させなければいけないから。」

美奈は簡潔に説明した

「ほほう演説か・・・」

涼介は考へるよに呟いた

「内容は言いつつへの涼介が考へろよ

隼人がニヤニヤしながら言った

「三人分のな」

恭介も悪ノリする

「・・・お前らなあ」

涼介はバツが悪そうな顔をする

「まあ生徒会への立候補にはまだ何力月もあるから、それまで生徒の信頼でも集めて票集めでもすれば？」

美奈が涼介の背中をぽんぽんと叩きながら言った

「お~い美奈」？ そろそろ帰ろうよ~

「あ~うんわかった。それじゃあね3バカトリオ。まあせいぜい頑張んなさい」

と言つたあと美奈は友達と帰つて行つた

「さて俺達も帰るか

「よし帰ろう」

三人は顔を見合させて頷き学校を後にした

続
<

第一章 級長・・・

次の日

「・・・よーしみんな今日は一日田とこつことでクラスでの役割を決めてもらおう」

H.Rで突然宮下が言い始めた

「ついにこの時が来たな恭介？」

涼介が言った

「あ？ 何の話だ？」

「馬鹿野郎！ このクラスの級長になることこそ生徒会入りの第一歩ではないか！」

涼介が熱く語る

「じゃあ勝手に入れよ少年。俺は楽な仕事を選ぶことにするから

恭介はそつと楽な仕事を探し始めた

「まったくヤル気も根性もないヤローだなあ。 なあ隼人？」

涼介は隼人の方を見る

「先生、俺はプリント配布係がいいです」

涼介の期待を見事に裏切り隼人はプリント配布係となつた

「オイオイ、マジデスカ？」

涼介はしょぼくれる

「さて誰か級長になりたい者はいるか？できれば立候補してくれる
とありがたいんだが・・・」

宮下先生はそう言ってみんなの方を見る

「ハイハイ、この俺がやつてのけましょー！」

と勢いよく涼介は手を挙げた

どうせ級長という役職は俺が生きてきた人生の中で誰一人自らやる
奴がいなかつたので

「ふつ、決まつたな・・・」

涼介がそう呟いた瞬間

「先生、私も級長に立候補でヤンス！」

誰かが立ち上がった

「なつなんですかー？」

三人が声を合わせて振り返ると一人の丸メガネをかけた痩せ顔の男

が立っていた

「私、鈴木英太郎は小学校の時からずっと級長という業務をやって来たでヤンス！こんなところで私の中の伝統を壊すわけにはいかないでヤンス！」

と言つて涼介を睨みつけてきた

「まつまさか、眼鏡をかけて語尾にヤンスを付ける漫画の世界でしか見たことのない希少種がいよつとは・・・」

涼介は絶句した。

「じつや、りいの男、他の学校じゃ有名ながり勉野郎らしこ。

「とこりわけで級長は」の私に譲つてもらひつてヤンス」

「ふざけるなよ、」の級長オタク野郎ー」の学園に革命起こす第一歩として級長の座は譲れねえんだよ！」涼介は睨み返しながら言った

そうやつて言い争つている間女子の級長は美奈に決まつていた

「えへ、決まりそつにないから皆に多数決を取つてもらおうかな？」

といひの争いを見ていた宮下が提案した

「上等だー、その案のつてやるぜ」

涼介がそつ言つと

「ふつふつふ初心者め、キャリアの違いを思い知るがいいでヤンス！」

鈴木も納得したようだった

「じゃあとりあえず皆に納得してもらえるような方針みたいなもの を述べてください」

富下がやつぱり

「まずは私から行くでヤンス」

といつて教卓へ向かった

「頑張れよ涼介」

といいやいやしながら一人が野次を飛ばしてきた

「・・・強敵だな」

涼介は呟いた

続く

第一章 √Sがり勉メガネ

「え～私が級長に就きさえすればこの学級はこの学園一優秀な学級になるでヤンス、私はどの行動にも無駄がなく指示ができる自信があるでヤンス」

鈴木は自信たっぷりに語る

「Jの学級が全てのお手本になれることをここに約束するでヤンス」

クラスの反応はまあまあという感じであった

やつきつたという感じで鈴木は教卓を後にする

チラリとこちらを一瞥しほくそ笑んだ後自分の席へ着いた

・・・ムカつく

「え～では次、八神君よろしく」

宮下が言った

涼介は教卓に上がり口を開いた

「あ～俺が言いたいのはほりあえず一言」

「それで楽しいと思うか?」

・・・クラス中が静まり返った。みんな俺を凝視してやがる。俺は構わず続けた

「確かにさつき言ったのがり勉級長オタク野郎が言つたことは正しいかもしない。だがそやつて優等生ぶるのつて楽しいか？俺は楽しくないね、そんなことしても最高につまらん日常が巡つてくるだけだ」

涼介は続けた

「だから俺の方針は自由だ、評判みたいなくだらねえことは気にせず俺達のやりたいようにやる・・・以上」

数秒の沈黙のあとクラス中から歓喜の声が出た

「やつてくれるぜあの野郎」

恭介と隼人が顔を見合させて呟く

涼介は皆に向かって握りコブシを高々と揚げると自分の席へ着いた

そのあと多数決が採られたが言つまでもなく大多数で涼介の勝利だった。そのあと鈴木は一人泣いていた

「あ～あ、あんたと一緒に級長なんて最低ね」

休み時間となり美奈が近づいて来てそう言い放つた

「お～お～そりゃ言い過ぎだろ？が美奈」

バツが悪そうな顔で涼介が言い返す

「ま、いいけど。そのかわり私に迷惑は絶対かけないでよ」

美奈は冷たく言い放つた

「照れんなよ美奈。俺と級長ができて嬉しいんだろ?」

涼介はニヤニヤしながら言った

「・・・死にたい?」

美奈が笑みを作つて殺意たっぷりに囁く

「申し訳ありませんでした!」

すかさず謝る

「まあ

「え?」

「これからよろしくな美奈

涼介が手を差し出す。美奈は顔を赤らめてその手をパチンとはたいて

「ぱつ馬鹿、何よ急に改まつて」

そういうと美奈は顔を背けてしまつた。するとそこには

「ヒュー、ヒュー、お熱いねえ、一人とも、

ヒー、ヤー、ヤーしながら恭介と隼人とが近づいて来る。

そのあと、一人が美奈の手によってノックアウトされたのは、いつまでもないだろう

やつやつて今日の授業は全て終了した

・・・しかし美奈の奴ちょっと可愛かったな

「さて、お前ら何故に級長に立候補しなかったんだ?」

帰り道、涼介は不満げに一人に言った

「お前に勝ちを譲つてやつたんだよ」

笑いながら恭介は言った

「そうだぞ涼介この中ではお前が全てにおいて優れているから俺達は身を引いたんだ」

恭介に続き隼人もそんなことを言った

「え? そうか? いや、俺も前々からそう思つてたんだよね。俺ってやっぱ生まれた時から天才だつたんだよ。わははははは」

涼介は満足げに言った

「調子に乗るな！」

二人は涼介にラリアットをかましてダッシュで逃げて行つた

「・・・こやろう共、ぶつ殺す！」

涼介はゆっくり立ち上がり一人を猛スピードで追つて行つた

続く

第一章 会議

級長になつてから数日が過ぎた

「……めんどくせえ」

涼介が級長に「えられた仕事をこなしながらそつまく

「……あんたがやりたいって言つたんでしょ」うが

美奈に頭を叩かれる

「いや……やつた」と無かつたからさあ

涼介がぼやく

「まつたく昔からあんたは後先考えず」行動するわね

はあ。とため息をつきながら美奈が言つ

「……一年になつたらもう級長やめるわ。よし終わつたああ

涼介は席を立ちあくびをついた

「まつたく、だらしないわね。ほり職員室行くわよ

「へいへい。あーだりい」涼介は悪態をつきながらついて行く

「さて諸君今日集まつてもらつたのは他でもない」

涼介の家にいつもの一人が集められていた

「んだよ涼介、金なら貸さんぞ」

「つーか俺達客だぞ？さつさとお茶菓子用意しやがれ」「う」

二人から野次が飛ぶ

「ええい、黙つて聞け愚民共が」

涼介は続ける

「やっぱ生徒会・・・つーかこの学園を仕切るには生徒からの絶大な信用がいる。そういう喧嘩が強くてダメだってことだ、力だけじゃ何も解決に至らないのだ」

「で、何が言いたい」

恭介が突っ込む

「まあ生徒からの信頼を得るにはやっぱ生徒個人個人の問題を解決していくことだ」

涼介は熱弁する

「で、具体的には」

隼人が菓子をボリボリ食いながら聞いてきた

「つむ。だからこそ今日貴様らに集まつてもらつた

「はあ？」

「まつたく意味がわからんぞ涼介」

「察するに現在うちのクラスは何も問題の起じりはず平凡なクラスだ」

「・・・まだ入学してちょっとしか経つてないだろ？だから皆はまだ緊張してるんだよ。だから皆がクラスに慣れてきたところで初めて問題が出てくる。とりあえずその時まで待つことだな涼介」

「いやいやいや、俺達票集めしなきやならないんだぜ？そんな時期まで待つてちや生徒総会が始まつちまつ。それまでに何件か問題解決しなきやならんのだ」

「まつたく無茶なことを言つなよ涼介」

「問題がない、それが問題だ！！！・・・俺今いこと言つたよな？諸君ノートに書き留めておけテストに出るぞ」

「言つてろボケ」

「そうやつて涼介と恭介が馬鹿な言い合ひをしていふと

「なあそつ言えば噂で聞いたんだが、うちのクラスに田中つていたろ？あいつ青海高校の不良グループのバイク誤つて倒したのがきつ

かけで、いじめやカツアゲやらの被害にあつてゐるらしいぞ?「

隼人が急に切り出した

「・・・それだ。それだよ隼人そういう問題こそ俺が待ち望んでいたものだんだよ」

涼介がパツと顔を輝かせる

「確かに解決すりやかなり信頼は集まるが具体的に何すりやいいんだ?」

恭介が聞いて来る

「まあそいつについては本人に直接聞いてみるのが一番だろ?」

隼人が言った

「・・・さあて面白くなつてきやがつた」

今日の会議はこれで終了しみんな解散した

続く

第一章 敵は青海編 説得

路地裏

「おこ、ちやんと持つて来たんだひつな

「……はー

「よし見せり

そつ言われて金を見せる

「へつへつへ毎度」苦労をさー。

男は金を見せた男の腹を鋭い切り殴る

「・・・あつあが・・・」ううううう

男は地面に倒れこむ

「まつたく良かつたなあ？俺らのバイク傷つけこれくらいで済んでよおー！」

つかまつている男に何発も蹴りを入れる

「・・・む・・・」ふつ・はあ・・・許して・・・へだそー・・・

「

「つけ、来週は五万持つでー！」

「…………五万は……無理です……」

「んだとてめえ？もつこつぺんとみのロード……」

とどめの蹴りを入れた後倒れてる男の頭に足を置き

「持つてこなかつたら殺しちやつよーっひやははははは

男は唾を吐いたあとその場を去つていく

「いやー田中ちゃんはホントいい金もつけの道具だわ」

「田代さんやうすぎたんじやないすか？」

外を見張つていた舎弟らしき男が駆け寄つてきて言つた

「いいんだよ、それよつこれからどつか遊びに行かせ。ちよつと
金もいりにあることだしな。ひやはは」

「マジっすか？今日は遊び放題っすね」

馬鹿笑いしながら一人は去つていく

「…………うぐつ……ちく……しょつ……チキシヨオオ……」

次の日

「おい、どれが田中だ？」

涼介が一人に聞く

「・・・お前級長だろ？ そろそろクラス全員の名前と顔くらい覚えろよ」

恭介が突っ込む

「ほら俺人の名前とか覚えるの苦手だからさあ」

笑いながら涼介が言つ

「はあ・・・あれが田中だ」

隼人が指をさす

そこにいたのは見た感じひ弱そうでクラスから孤立してそうな感じの男、田中孝司たなかこうじがいた

「いかにもつて感じだな」

涼介が呟く

「ああ、どうやって近づく？」

「取り合えず・・・何日か張り込むか？」

「・・・ドラマの見すぎだ」

「だつたら聞き込みだな。奴の近況を調べる」

「まゝ無難な考えだな」

「うし行動開始だ！」

涼介が動いた

「つかあいつの近況なんて誰に聞いたら分かるんだよ」

恭介と隼人は立ち尽くす

「おーい田中、最近青海校の連中にボクられてんだってな?」「ちゅ・・・直接行きやがったーーー!」「

二人は愕然とする

•
•
•

田中は黙つている

「おい聞いてんのか田中？」

涼介は続ける

一
・・・西ノルマノ
カタカナ

「あ？」

「だからせつとこじょ」

田中はそう言い放った

「お前・・・悔しくないのか?」

「そりや悔しこそーでもどうじろつてんだよ、僕は氣弱だし喧嘩だつて強くない、おまけに相手は有名な不良でしかも舎弟がいる。勝てるわけないじゃないか!」

「・・・はあ。やつてみてもないのにすぐに諦めて、このままずっとそこにつらうめられてそれでお前の人生満足だつてのか?」

「・・・」

「本当にそのままでいいのか?自分を変えたくないのか?やられたらまんまでお前は終わつちまつのか?やり返したくないのか?」

「・・・」

「やつやつて何もしないでいる奴を負け犬つていうんだよーおまえは負け犬のまま生きてこきたいのか?どうなんだよー」

「・・・嫌だ」

「なんだつて?」

「負け犬で終わるのは嫌だ!奴に復讐したい!ぶん殴つてやりたい!」

田中は叫んだ

「ふつ。お前なら絶対そう言つて信じていたぜ田中」

涼介は田中の肩をぽんぽん叩きながら言った

「……でもハ神君と話すのって確か初めてでしたよね？」

「気にするな少年。気にした時点で貴様の負けだ」

「はあ・・・・」

「まあ詳しい」とは後日話す。それまで体でも鍛えとけ

そう言つて涼介は一人の元へ戻つて行つた

「・・・アホだな」

「まつたくだ」

「誰がアホだ」

「で?このあじぎつすんの?」

恭介が問う

「・・・なるよつてなるぞ」

涼介はフツと笑うと遠い眼をして窓の外を眺めた

「何も考えてねえのかよ、このボケ！」

そのあと涼介は一人から何回か蹴りをもらつた

続く

第一章 敵は青海編 会議2

「・・・田中の野郎、とうとう金払いに来なかつたな」

チッと舌を鳴らす

「これからどうあることですか田代さん?」

舎弟が訊いてきた

「・・・もちろんお仕置きが必要だうつねえ。一度と俺達に刃向えないくらいに心も体もボロボロにしてやるまでや。」

「わしうが田代さん。これから楽しみますねえ」

「ヤリと舎弟は笑つ

「ヤードリヤッて料理しようかねえ」

やつはと田代は、とても残忍な笑みを浮かべて笑っていた

「ヤードリヤッて料理しようかねえ」

城北高校教室

休み時間となり田中を含めて集まつた四人は、近々始まる青海との

決戦について話していた

「つーかその前におまえをやった相手は一体どんな奴だ？」

「・・・確か、田代っていう奴です。確か舎弟が何人かついていました」

「・・・舎弟つていつの時代の人間だよそいつ」

「つーか田代って聞いたことあるぞ俺」

恭介が言った

「マジで? 何? お友達?」

涼介が茶化す

「言つてろ馬鹿。田代って言えば青海で一番有名な不良、梶原のお氣に入りの一人だよ」

「梶原の!?」

涼介と隼人が声をそろえて驚いた

「あの・・・梶原つて?」

田中が訊いてきた

「・・・ああ。梶原つてのは、ほら一年前ちょっと注意した教師を瘤に障つたという理由だけでバットで顔を殴打して全治六ヶ月の重傷負わせて年少・・・つまり少年院に送られたイカレ野郎だよ。確か

かこの事件はニュースで報じられたからお前も知ってるだろ?」「

涼介が説明した

「・・・思い出しました。その他にも色々やった人ですね?」

「ああそうだ。しかしこいつはちょっと厄介なことになつたな

涼介が考えこむ

「確かに梶原は先月年少でたらしいぜ」

隼人が言つ

「おいおい政府はあんなイカレ野郎を世間に野放しにして何やつて
るんだよ」

「まったくだ。しかし田代だけをやるのは簡単だつが、お気に入
りがやられて黙つてる奴じやないだろ? 梶原は」

恭介が言つた

「そりやそりやだらうな。俺だつて仲間がやられたら黙つてなんかい
られないぜ」

「まあ確かに面倒だな。でも今回の目標は田代だ。梶原のことは後
々解決すればいい。」

そして涼介は大きく息を吸つて真剣な顔で言つた

「・・・田中」

「何ですか？」

「分かっていると思つが田代をやるのはお前だ」

「・・・」

田中は黙つた

「今まで苦汁を飲まされたのは俺たちじゃない。だから俺たちが田代をやつても意味が無いんだ」

田中は黙つたまま聞いていた

「だからと云つて俺たちは何も協力しないわけじゃない。確か田代は舎弟を連れているといつていたな」

「・・・はい」

「俺たちは舎弟の方をやる」

恭介達の方に田をやると、仕方ないと云つた様子で軽く頷いた

「まあ、とつあえず今のままでは田代に勝てないだらつな」

田中黙つて田を伏せる

「せつ心配するな。俺等が喧嘩のやり方教えてやるよ

涼介が自信満々で言つ

「一応中学んときは俺達に逆らひ奴は居なかつたんだぜ？」

恭介も続く

「逆らう奴はたくさんいただろ？ ただ単に向かつてくる奴をブチのめして言つ事聞かせてただけじゃねえか」

隼人が訂正する

「・・・まあそういう訳だからとにかく、そこらへんの奴等よりかは俺達は強いってことだ」

涼介が言つた

「まあ、俺らに鍛えられればお前は田代に勝てるさ。話を聞くに、奴は自分より強い者に対しては親しく近づき、弱い者に対しては暴力で支配する典型的な臆病者タイプだ。たぶん喧嘩の実力はそれほど高くないだろ？ よ」

「だからお前にも勝つチャンスがある。とにかく今までのお前は奴に対しても弱腰で、なされるがままにやられていた。まずそこから変えないといけないな。」

「はあ・・・具体的にどうすれば？」

田中が訊いて来る

「とりあえず身なりをフルモデルチェンジだな。今日学校終わつたらちよつと付き合え」

「・・・はい」

田中は不安そうな顔をしながらも涼介の言葉に頷いた

そして放課後

「ちょっと涼介どこ行くのよ」

美奈が怒った表情で尋ねる

「すまないがこれからとても大切な用事があるのだ」

そう言って涼介は教室を出て行こうとする

しかし後ろから首を絞められた

「待ちなさい。先生に頼まれたこの仕事はどうするの?」

「・・・ちよ・・死ぬ・・」

「まさか私に全部押しつける気じゃないでしょ?」

とても怖い笑みを浮かべながら美奈は訊く

「いや・・あの・・・その・・」

「仕事する?それともこの世からバイバイする?」

「どうちも嫌だーーー！」

涼介はそう叫ぶと全力疾走で逃げ去った

「ちょ、ちょっと涼介！？待ちなさいー！」

後ろから何か聞こえたような気がしたが自分に幻聴だと言い聞かせ
我武者羅に逃げた

「はあ・・・せっかく仕事終わつた後一緒に帰るつと思つてたのに。
・・・バカ」

美奈はそう呟くと一人教室に戻つて行つた

「おせーぞ涼介」

校門に行くと恭介、隼人そして田中が待つていた

「はあ・・・はあ・・・すまん。ちょっと恐ろしい魔女から逃げていた
のだ」

息を切らしながら涼介が言つた

「なんだ美奈か？おおかた仕事放り出して逃げて来たんだろ？」

恭介が笑いながら言つた

「まあそんなどこりだ

「とつあえず早く行こうぜ。もたもたしてたら日が暮れちまう」

隼人が促す

「もうだな。それじゃあレッソゴー」

そつ言つて四人は町へ歩き出して行つた

続く

第一章 敵は青海編 変化

「さて、まずどこから変えようかね」

涼介が呟く

「やはり服装からだらつ」

隼人が言つ

「俺らがいつも行く店にしようぜ。あそここの店なら事情話せばタダで貸してくれるかも知れんぞ」

恭介が言つている店は美奈を含めた四人が幼い頃からよく行く店のことである

「そいじゃ、行つてみるか」

四人は店の方へ向つて行つた

駅前に面した小さな洋服店”アサギ・インフィーット”そこが涼介達の行きつけの店である

「おーす、タケちゃん元氣〜?」

店に入るなり大声で涼介は言つた

「あら涼ちゃん。残念だけどお父さんは今いないわよ

店の奥から出てきたのは涼介達より三つ上のお姉さん的存在の浅木舞^{あさぎまこ}であった。髪の毛はストレートで体型はスレンダー、容姿は超が付く美人でありさらには性格もいいというまさに文句なしの女性である

「おっす舞ちゃん。いつものことながらお美しい、結婚してくれ

「そ、ねえ、涼ちゃんなら構わないわよ~」

「わ~い結婚だ~」

「いい加減にしろ」

この状況を見かねて恭介が突っ込む

「つーかタケちゃんどこ行つたの?」

隼人^{はやと}が訊く

「えーともうすぐ帰つてくるはずよ。あつほら~」

振り返るとそこにはサングラスを掛けあ^{あさぎたけひづ}ひげを生やしたオッサン、浅木武弘^{あさぎたけひづ}の姿があった

「よ~タケちゃん元気してた?」

涼介がパツと顔を輝かせ手を振る

「おーどうしたクソガキども、何か用かー?」

「今日は娘さんをもりいに来ました」

「そうか、持つてけ持つてけ」

「やつたー・・・・・・・・誰か止めるよ」

涼介が周りを見ると恭介たちは無視してすでに田中の服を探し始めた

「おい、てめえらー！」の空氣ぞいつしてくれるんだよー。」

「・・・貴様が勝手に作りだしたんだろうが」

恭介が冷淡に突っ込む

「・・・冷たい奴だな」

涼介も觀念して服を探し始めた

「おーいタケちゃん。特攻服置いてないか？」

「んなもん置いてるわけねえだろ」

「品揃え悪いなあ」

涼介がぶつぶつ文句を言つ

「おー、これなんかいんじゃね？」

涼介が手に取ったのは赤いジャケットだった

「これの下に黒のTシャツを・・・ほんでもってジーパンを・・・」

一通り決めると田中を試着室に押し込めいろいろ試してみる

數十分試着を済ますと結局最初に涼介が言つてた服で落ち着いた

「さて・・・邪魔したなタケちゃん」

手を振つて涼介達が帰ろうとすると後ろから肩を掴まれた

「おじクソガキ・・・お勘定がまだだぜ?」

タケちゃんが凄味を増した声で呟く

「いやーその・・・田中ー」

「はい」

「支払い・・・頼んだ」

「はーー!?」

「とりあえず」の場は田中に支払わせてなんとかタケちゃんから脱出した

「イヤー買つた買つた」

涼介が満足そうに言つた

「で次はどうするんだ?」

隼人が尋ねる

「やはり頭髪だろう。この頭じゃなめられるぜ」

恭介が答えた

「うむ、確かにそうだな」

「さて、どうしようかね? 気合い入れて坊主にするか、それとも今流行りの髪型にしてダサい髪型からオサラバするか」

「つーむやつぱショートカットで頭ツンツンにした方がいいだろ? それにグラサン掛けたら格闘家っぽくね?」

「・・・まあその辺が妥当だろ? な」

意見が一致したところで四人は美容院に向かった

1時間後

「おーおー! これはなかなかだ!」

涼介が満足げな顔をする

「・・・そ、そうですか?」

田中は少し不安げな顔をする

「おーおー田中君、そんな言葉つかいじゃダメだ。今から一切敬語は使ひな」

「え・・・は、はい」

「・・・まつたぐ。今使ひなと言つただりがー」

「すみませんー。」

「使ひなあああー。」

「はーーー。」

さうして一時間経過

「・・・よし、最後は喧嘩の方法だな」

「ひむ

「お、なかなか型にはまつて來たな」

田中はーーの一時間で遂に敬語から脱出した

「まあ喧嘩は取り合えず心が折れた時点で終わりだ、だから氣い失うまで相手を殺すつもりでいる」

「ひすーーー。」

「あとは単純。ただ本氣で相手を殴るだけだ。テクニックなんて要

らないからな。これは格闘技ではない、喧嘩だ。ただ相手をぶつ殺すその気持ちが大きければ今回の相手は勝てるはずだ。しつかり自信を持て」

「うす

「よーし今日はこれで解散だ。田中はこれから一週間後の決戦までただ拳を鍛える。何発相手殴つても壊れないようにな」

「うす

「よしじゃあ解散

一人帰り道の違う田中と別れ三人は家の方へ歩き始めた

「さて大丈夫かね?」

恭介が訊く

「ああ。奴ならやつてくれるさ」

涼介が自信満々で言つ

「俺もいけると思つぜ」

隼人も涼介に賛同する

「さて、俺らも気合入れないとな

涼介が背伸びをしながら言った

「ああ、相手の数がわからん以上こちらも警戒しないと」

隼人が言った

「でもまあ、俺らなら雑魚の十や二十なんて余裕だろ?」

恭介が笑いながら言った

「当然!」

涼介と隼人が口をそろえて言った

そして夜は更け、三人はそれぞれ帰路へ着いた

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9647c/>

学園革命

2010年12月31日21時30分発行